

暗黒はいつも忍び足で

「かまきり蠅螂の斧おのを怒らして隆車（戦車）に向うが如し」（平家物語）。福井県美浜町の原子力発電重大事故発生に当たり、あえて私はその巨大機構を告発する。

三年前、昭和六十三年四月二十七、八日、各全国紙がのせた原子力発電の巨大広告の異常さが忘れられない。この広告とは、原子力各職場からの二十人ほどの男女の顔大写真でページを埋め、「全国十五カ所の原子力発電所で働く二万九七五七人からのメッセージです。私たちが安全を守ります」と宣言。「安全が何より大事であることは、私・た・ち・自・身が一番よく知っています」。ソ連の重大事故は「日本では起こりえない」と。

原子力現場の自分たちが安全性を保障しているのだから、私たちに任せなさい、と言わんばかりの高慢さありあり。「私たち家族もそこに住んでいるんですよ」と日ごろ公言しているのと同じ思想だ。それはあなたたちの勝手、安全性の保障とは何の関係もない。

あなたたちは内部、職場仲間まで平然と裏切っている。あなたの組合は公表している。「原子力研究者・技術者らは九〇%が安全に不安」（大分合同二・三・十八）と。

もう一つ。ふだんなら極めて不安恐怖の場所に、事故発生時なら危険な事故現場に、本当に身を置くのはすべてあなたたち「安全を守る」本職員のみだろうか。下請けや臨時へのおしつけはないのか。やや高いアルバイト代で中、高校生も混じっていると噂もある。ともあれ誇大広告は許せても、欺瞞的広告は許せない。この高額広告にとびついた各全国紙も同罪である。広告でいどで騒ぐことはないなどと、小さなこととして許し、黙殺していく、その積み重ねが日本の暗黒時代を作った。半世紀前の血の教訓である。

（一九九一年二月二十五日）